

「盗難事件をきっかけに」

私が症状のために決定的に落ち込み、身動きのできないくらい心の自由をなくしてしまったのは、生まれてはじめて東京本社に転勤になった翌年の、昭和四十八年の夏ごろのことです。会社は日本有数の旧財閥系の不動産会社で、社員はエリート意識がきわめて強く政財界や名家の子弟が多くおり、親類も殆どない東京で、同期入社全員が東京に一緒に勤務することによって比較されているという意識からの緊張のほか、直属上司二人の対立のすぐ下にいての精神的な葛藤などの困難な環境条件に加え、昭和四十八年春、課長代理に昇進して、これからますます一生懸命がんばらなくてはと思っていた矢先に、会社で起こったショッキングな二つの事件にとらわれてしまいました。

それは隣りあった子会社と、私の部とで相次いで起った合計数十万円の盗難事件で、同じ部の人が事情聴取を受けたり、机の上の指紋をとられたりというような話を聞き、外部説と内部説があり、全員が疑いをかけられているようでもあり、そうでないようでもあるというあいまいな話にとらわれだし、潔白なのに万一分も疑われたらこわいという思いで、しだいに身動きもできないような恐怖に襲われました。

そして、こういう場合のつねで、信仰で心の平安を得ようと、より一生懸命にお経をあげたり、静座して「私は神の子だ、強い、恐れない」と潜在意識に唱える行をして、ますます恐怖にとりつかれていったのでした。このとき、森田療法の教えが身につけていれば、こんな方法はむしろ恐怖心を助長する以外の何物でもないことがわかるのですが、悲しいかな、むしろ目的を見失なって、日常生活を一生懸命にすることよりも、プライドを守ることや、恐怖心を取り除くことに躍起になっており、疑われたらこわいという観念が頭にこびりついてしまいました。不眠で悩み、恐怖心をなくしたい、不安を忘れようとしてランニングをしたりして、目的本位の行動とはまったくかけ離れた生活態度となっておりました。